



鯨とマヤ

宏一郎

”あれー、間違っちゃったかなー私ともあろうつ女がー”

ハマの名物レンタル嬢マヤ、今度の勤務はいささかちんけな捕鯨船だった。主に南極海で操業する五千トン級の帆走併用動力船エイコード号は横浜を母港にしている。

大体、捕鯨の仕事はこの大きな船だけではできない。三隻の船足の早い小型船群、キャッチャーボートと組んで半年の操業航海をする。これらの乗り組み員二百人ほどのチームのためにマヤは雇われたのだった。もっとも、マヤ自身は主として船長ビーハブのもちものとして、船員たちには時間を限定して別途運用されるといふ契約だ。

こんなことだって例のないことではない。いつだったか、世界一

周の貨物船の船長と契約して半年間乗船したのだけれど、船長がマヤを独占したので、船員たちの空気が剣呑になってストライキが起こり掛けた。マヤだって、船長室に監禁されてしんきくさい老人のおもちゃになるよりは、多少疲れても若い男どもをとつかえひつかえして過ごす方が気が紛れるというものだ。

だから、マヤはビーハブ船長の骨柄を見極めてから契約した（積もりだった）。半年という期間も長いし、それに世界各地に寄港する一般の船に比べ、捕鯨船では途中で降りるのが難しい。余りぞつとしない嫌な男では困るからだ。船長は50歳とは思えない若さで、男っぽく、海の男らしいさばさばした感じがマヤは気に入り、まあまあだと思って契約したのだった。乗組員の募集にもマヤはちゃっかり使われて、船の上からビキニで笑い掛けるチャームモデルの役もさせられるなどやり手でもあった。船長はこのエイコード号の大株主でもあり、狂牛病ほか様々な奇病の蔓延によって食用に適さなくなつた、21世紀中葉の、最終大戦後の地上の家畜肉獣に替わつて世界中でもてはやされるようになった鯨肉ブームに乗って、ひと儲けしようかという様子でもあった。

さて、募っていた船員たちも員数全員が決まり、半年分の乗員の

食料をはじめ、様々な資材機材が船に運び込まれていく最後の日だった。マヤは最後の陸上の夜を行きつけの飲み屋で楽しく過ごしていた。マヤは呑めるくちである。

「おい、マヤ、エーコード号に乗るんだって？」

最近知り合った船乗りだ。腑におちない言い方で、気になったマヤはビーハブ船長の変な噂をそこで聞きだしたのだった。

「なに、気にしないでおくれ。単なる噂だ。おまえのような海干やま千の女が、いまさらびびることあねえよ。それなりに楽しんでくるんだな。」

そうなのだった。ビーハブ船長は第一印象の「海の男」そのものこと異なっって、結構変わった趣味の人間だった。そして、マヤは海に乗り出したエーコード号から逃げ出したりは出来なかったから、ともかく契約期間の半年を我慢しなければならなかったのだった。

「ま、慣れるまで我慢してくれよな。おまえを見てから、ともかくむしの収まりがつかなくなったんだ。いいこだから、合わせてくれよな。なんにしても、これだって男とおんなの関係だ。いつだって、おれが目星をつけた女は、結局満足しきって別れることになるんだから…。」

ビーハブ船長の告白を聞いたのは航海初日の夜だった。マヤが肝を潰したのはいうまでもない。これは船員たちには内緒にして置かねばならないだろう。

マヤはいわゆるプレイメートのな、堂々たるグラマラスな肢体の持ち主ではない。どちらかというと東洋的な、ほっそりとした優美な長い手足がチャームポイントなのだ。もっとも、乳房の大きさは、巨乳とはいえないまでも、センターフォールドの彼女たちに比べても見劣りしない隆さと丸みを保持してはいたけれど。

そんな身体を見ると、船長はむらむらと虐待したい気分が起こるのだという。つまり、ビーハブ船長はサドだったのだ。マヤはもちろんマゾではないし、縛られたり、吊されて萌える身体ではない。もっとも、娼婦を十年近くやっておれば、そんな客は珍しくなく、ごまんと来るものだ。だから、驚くことも、怯えることも、こわがることもマヤは一応卒業している。もちろん演技としては、身体でそんな反応をすることが出来るのがマヤのしたたかさだった。客はそれを見て満足して帰っていく。

ただ、受ける側としては、客に道具まで使われ、きっちりことんまで実行して、最大満足していかれると困る面があって（徹底さ

れたら殺されることもあるし、そこそこで終わってもらわねば、疲れもひとしおなのだ。

しかし、この半年を社会に隔絶した海の上、船長室という密室で、じっくりさしでこのプレイを愉しまれるということは、結構、マゾ役のマヤにはきついことになりそうだ。実際、「初夜」のベッドで、マヤは船長に早々と手足を大の字に括り広げられて激しく、「犯され」、演技ばかりでもない辛い気分の悶えを見せてしまったことだった。

マヤはエイコード号のセックスアイドルだったし、それを期待して雇われた船員たちも多かったはずだ。マヤには極小のマイクロビキニが似合っていたし、それで船内や甲板を出歩いて皆に観賞され、楽しませることが義務づけられた。それはいい。露出趣味のマヤはそんなことには慣れてる。しかし、ビーハブ船長はマヤがそれくらいのことには平気らしいことを見抜いて、更にエスカレートさせてきた。すぐトップを外させたし、やがてボトムも禁止して全裸のままの腰に綱をひと巻きするだけで日常を過ごすことになった。船員たちは彼女の細い古ロープのルーズな回し方、そして右の腰骨あたりで一度括った余りの紐を股の高さまで垂らした、そのたったひとつの彼女のアクセサリーを実に色っぽいと賞賛した。

ま、それもマヤにはさほどのことはなかった。街なかでそんな格好を強いられたら、マヤだって困惑するはずだが、ここは皆、顔見知りの男ばかりの小さなコミュニティだった。船員たちが相好を崩して喜ぶ顔を見るのがマヤには嬉しかった。非番の男たちにまといつかれてあちこち触られたり突っつかれたりするには閉口したけれど。

そとで昼間から押し込まれることはなかったけれど、そんな風景をおかずにし、自分で慰んで出してしまう男たちは多かったようだ。当初、なかなか船長室から出してもらえずさんざ括られ、むさぼられた続けたマヤもようやく間遠になったことで、船倉に自分の部屋をあてがわれて、そこを店にした船員たちへのベッドサービスが既に始まっていたけれど、これは航海終了後に精算される有料サービスだったので、彼女とのメイク・ラブのチケットを切ることを吝しむ下級船員たちは少なくなかったということだ。

それは予想されたことで、しかしそれでも最初の夜、船倉のマヤのベッド近くは結構混み合い、マヤには辛い夜になった。待ち切れない男はマヤ自身の勧めに応じてベッド際に立ち、フェラで満足することになったし、更にせっかちな者には肛門へも許し、三人がマ

ヤを同時に責め抜いて愉しむ光景もあった。さすがに明け方にはマヤもぐったりして仮眠をとったし、しばらくは外を出歩くこともはばかれるほど彼女の器官は緩んだことだった。

もつとも、そんなあらごとを乗り切らねばいつちようまえの娼婦とはいえないわけで、三日もすればやはり皆も飽き、すっかり落ち着いたのだけれど。

赤道祭でマヤはマストに高だかと吊り上げられ、きりきり廻されて恐い思いをした。もちろんビーハブ船長の企画だった。しかしマヤが思ったほど恐がらないことが彼には不満なようだった。括るだけで満足をするサド男も多かったけれど、余りに堂々と括られてしまつマヤに、このごろ船長は余り食指を動かさなくなっている。それで、赤道祭のクライマックスでは吊り刑から解放されたマヤを甲板に集まった船員たちが全員で輪姦する筋書きを作ってみたのだった。もちろん船長のおごりだった。マヤはめちゃくちやに扱われ、際限もなく回されつつも、自分からも積極的に楽しんでいるようだった。

「おまえを本当に恐がらせるにはどうすればいいのかな。」
困ったひとね、そんなことに情熱を燃やされたら、私、いつか殺さ

れてしまつかもね。マヤは祭りのあとの船長室のベッドで、なお荒々しく騒ぐ身体の血と息の乱れを押さえつつ、汚れ尽くしたままの自分の全身を舐めるように這う船長のねっとりした視線を煩わしく思いながら、いつもの習慣として括られ、手足を張り広げられるままになっていた。

「そうだ、あいつ、イシユメールがいなかったな。」
マヤの表情をなげなく眺めながら突然船長が言った。もちろんその中に当惑と羞恥の影を見つけようとしたのだ。

マヤも女だった。やはり船員たちの中で若く、気にいった男にはサービスも本意気になる。その中でも皆の噂にあがった若者がイシユメールだった。マヤはこの若者にチケットなしでやらせているという噂だった。キスをしているのを見たというものもある。それが本当だったのか、どうか。

「どうなんだ。おまえらしくもないっていつてるぜ。あんな鼻たれに熱をあげるなぞ。」

そうかしら。それはもちろん私への誉め言葉じゃあないわね。

イシユメールはマヤを抱かなかった少数の男のひとりなのだった。ギリシャ彫刻のような綺麗な若者だった。マヤは一目見て気にいつ

ていたが、夜は見かけなかったし、昼間もなんとなく自分を避けている気配があつて接触がかなわなかった。いつも一緒にいる男（彼は来た。まさか、ホモではないらしいし…）に仲介を頼んだ。一度試さない？つていつてもらったのだ。しかし、来なかった。

もつとも、高級娼婦はこんな、自身傷つくようなことはしないものだ。マヤはまだ純真な面があつて、ぶざまな失恋も辞さない勇気を持っているのだ。いや、船長に言わせれば、恥知らず、破廉恥な女のむこうみずな言動として理解しているということだろう。

マヤも常識は持っている積もりだ。娼婦には人並みの恋は出来ないらしいということ。マヤは、自身、女としては上等の部類に入るはずだと思っているけれど、それでも、娼婦であれば、かなり割引きされるのが世間相場なのだと感じている。私は、あの綺麗な若者とは釣り合わない女なのだろうか。

一晩激しく揺れた船は翌日南極海へ入った。捕鯨が始まる。鯨の群れが見つければ、船は本来の作業を開始するはずだった。久しぶりに甲板へ出たマヤは、唐突にその若者と出会った。

「イシユメール、こんにちは。今日は非番なの？」

若者はちょっと眩しそうな目をして会釈した。マヤの目線よりも一

寸ばかり高かった。

「こんにちは、マヤさん。僕の名前を知っているんだね。」

「貴方も私の名前を知ってたわ。うれしい。」

「君は船でただ一人の若い女だし、僕はその他大勢の男だ。どうして僕の名前を知っているんだ。」

「知ってたら、迷惑？それとも。」

「もちろん、光栄だ。」

ちよっぴり皮肉めいた感じでもあった。

「貴方、来ないわね。私のところへ。」

「金がないんだ。それに……。」

「それに、どうなの？」

それには答えず、若者はマヤのどがった乳房のあたりを見て溜め息をついた。悩ましい気分になっているのだろう。マヤは男の腕を掴んで自分の腰へ回した。男は素直にその冷たいむき出しの膚に手のひらを添わせた。

「寒いだろう。どうして服を着ないんだ。」

「これが私の仕事なのよ。寒いわ。だから、抱いて。」

「誰かも言ってた。君とはいつだって、どこでだって出来る。だが

らいつもチケットを切られるおそれがあるぞって。」

いつも素っ裸だから、いつも剥き出しだから、すぐ可能なのは確かだ。でも、これって、当人もいつも風やら、身近な手摺りなどにも直接触れることを避けられないことで官能が刺激されることがあって、辛いものなのだ。もちろん男の目も強い刺激になる。当然その反動で、男だってわなを私に感じているはずだ。案外本音なのだろう。逃げ腰になっている。

「貴方には切らないわ、チケット。だから、抱いて。入れてもらってもいいわよ。いつだって、OKなのよ。貴方にはね。」

「本当かい？ありがとう。でも、もう、いかなくちや。」

イシューメールはキャッチャーボートの乗り組みだった。銃撃ちの見習いだということだった。綱の束を抱えた彼をデッキで見送った。

すんでのところで獲物に逃げられたマヤだったけれど、全く脈がないこともないとも思い、またチャレンジしようかと心に決めた。懲りないマヤだった。

その日の午後遅く、イシューメールが乗り組んだボートが仕留めた長須鯨がエイコード号の後部斜口から手巻きウインチで引き上げられてきた。今次航海最初の獲物だった。マヤは命じられて甲板に長々

と延べられた巨大な鯨の腹へ這い上がり、そこで第一刀の傷から盛んに吹き上がった血潮をその裸の身の全身に浴びて真っ赤になった。そのあと、そばにあった鯨の男根に抱きついて意味なく笑った。

終わり

解説寸評

宏一郎氏の作品には特定の名前が出てくる事が多いがこれも「マヤ」と言うかなり思い入れのある名前の一連のシリーズ化された作品の一つである。

氏の豊富なオリジナリティを持つテーマとして六ヶ月を超える長期間を一つの捕鯨船で過ごす男多数の中に女ひとりの性の物語と云う設定が冒頭にあり、読者を引きずりこむ手法はさすがである。

ラストシーンで巨大な鯨の男根にエマが抱きつくところで筆者は思わずほくそえんでしまった。

惜しむらくはこの牡鯨が海中で交尾している壮絶なシーンのエピソードとこの鯨の男根のサイズを記述してほしかったと願ったのは筆者ばかりではなかったかと思われる。

多分長さは二メートルは下らず、太さもアイススケートで金メダルをとったS選手の太ももに負けないぐらいの物であるとおもわれる。

蛇足となってしまうかも知れないが、むかしTVでイルカの交尾しているところを海中カメラで撮影したものが放映されていたがこれには感動させられたものである。

雄のイルカが交尾前に泳ぎながらメスのバギナを胸鰭（むなびれ）を震わせながら前技行為を五分以上の時間を掛けて繰り返し行っていた。そしてやがてクライマックスのシーンとなるが青い海水

が膺からあふれ出た精液で真白く濁るほど多量に射精したシーンはたっぷりが自慢の諸氏も思わずウーンと唸り声を出さざるを得ないものであった。話がわき道へそれてしまったが宏一郎氏の愛する

「マヤ」シリーズの今後の作品が楽しみである。

出来うれば、終戦後のまだ日本が戦争に負けたばかりの頃を背景にして「パンパン」と呼ばれた売春婦達の悲哀物語を氏特有のペンタツチで書いてもらいたいと願うものであります。

発刊 「アマゾンニア館」

著者 宏一郎

寸評 あきら